大峰ヶ台遺跡 11 次調査　現地説明会資料

平成 21 年 8 月 29 日（土）15：30 ～ 16：30

大峰ヶ台遺跡 11 次調査は、民間の宅地開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査です。調査の結果、弥生時代～江戸時代の遺構ほか、弥生時代前期と推定される磨製石剣をはじめ、たくさんの遺物を発見しました。

所 在 地：松山市南江戸五丁目 1445 番
調査期間：平成 21 年８月３日（月）～同年８月 31 日（月）
調査面積：約 156㎡
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1. はじめに

大峰ヶ台丘陵内にある大峰ヶ台遺跡では、これまでに 10 回の発掘調査が行われています。大峰ヶ台頂上部では弥生時代中頃の集落跡が発見されているほか、北西部の尾根上には古墳時代前期の朝日谷２号墳をはじめ、数多くの古墳が分布しています。また、北方 150 m には鎌倉時代初期の建築と伝えられる国宝大宝寺本堂があります。本調査地より南に下がった平野部では、中世の土師器の土器だまり遺構が検出された南江戸鬮目遺跡、古墳時代の大灌漑施設が発見された古照遺跡などが発見されています。

このことから今回の調査でも弥生時代から中世にかけての集落遺跡が発見されることが想定されたため、集落の範囲や性格の確認を主目的に発掘調査を行いました。

2．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は中・近世の溝・土坑・柱穴、古墳時代の溝などです。遺物では弥生時代から中世の各時代のものが出土していますが、そのほとんどの物が破片という形で出土しました。

(1) 遺構

●中・近世

溝 1 は東西方向にのびる溝で、検出した長さは 13 m、最大の幅は 2 m、深さは 40cm です。肩部は北と南では 30cm 前後の段差が見られます。溝は単一層で埋まっていて埋土中からは、土師器の皿、土鍋の破片の他、10 ～ 15cm 程の礫石（川原石）が出土しました。溝の用途については埋まっている土の色、調査前の地形の等高線とほぼ平行する事などから畑地耕作に伴う溝ではないかと考えられます。

溝 2 も東西方向にのびる溝で、検出した長さは 14.7 m、幅は 1.1 m、深さは 15cm です。この溝も単一層で埋まっていて埋土中からは、混入したと思われる土器片の他、10cm 程の礫石（川原石）が出土しました。溝の用途については溝 1 と同様と考えられます。

柱穴は直径 20 ～ 70cm､深さは 20 ～ 50cm です。2 基の柱穴より 15 ～ 20cm の柱の痕跡が確認されました。本来は建物跡の柱穴と考えられますが、現段階では建物跡の復元にまでは至っていません。

①大峰ヶ台遺跡 11 次　②大峰ヶ台遺跡 10 次　③大峰ヶ台遺跡３次
④南江戸客谷遺跡　⑤南江戸鬮目遺跡１次　⑥南江戸鬮目遺跡２次
⑦古照遺跡　⑧南江戸桑田遺跡　⑨松環古照遺跡

第１図　調査地位置図（S = 1/5,000）

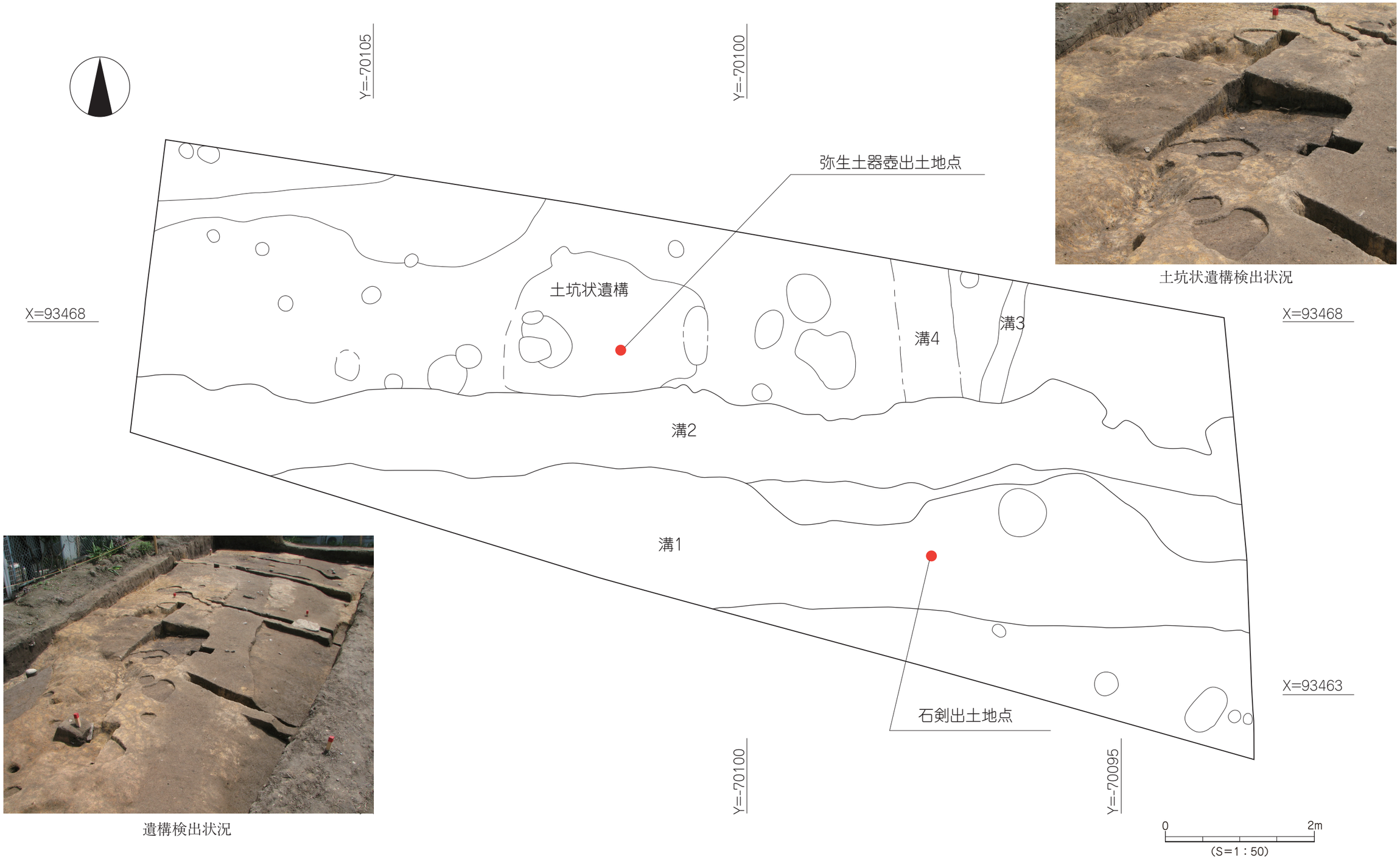
●古墳時代

溝 3 は検出した長さは 1.6 m、幅は 30cm、深さは 20cm です。埋土は黒褐色土で遺物は土器の小片しか出土していませんが、溝 4 と同じ埋土による事から古墳時代と考えられます。用途については今後の整理作業により解明されると思われます。

溝 4 は検出した長さは 1.8 m、幅は 75cm、深さは 20cm です。埋土は黒褐色土の単一層で、埋土中からは須恵器の破片が出土しています。この溝も用途については溝 3 と同様整理作業により解明されると思われます。

●弥生時代

土坑状遺構は長さは 2.6 m、幅は 2 m、深さは 30cm の楕円形をしています。埋土は地山土 (黄色粘土) と少量の黒褐色土の混合土で埋まっています。遺構のほぼ中央部より弥生土器の壺の底部の破片が出土しました。土器の出土は少量ですが、土器を埋納した遺構と考えられます。



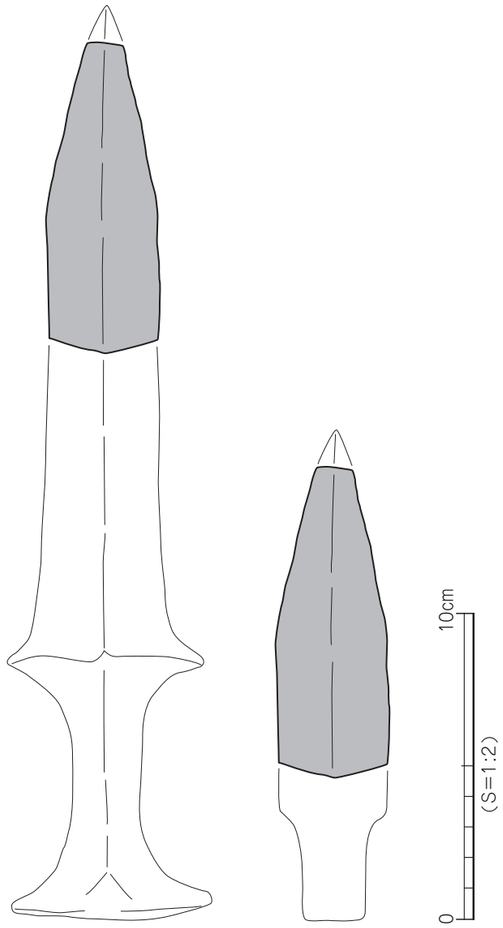
土坑状遺構検出状況

遺構検出状況

第２図　遺構配置図

石剣写真

石剣出土状況



第３図　磨製石剣想定復元図

(2) 遺物

■弥生時代前期

磨製石剣は溝１より出土しました。剣の鋒と柄は欠けていて表面は風化しています。残存している長さは9.9cm、幅は1.3～3.5cm、最大の厚さは0.67cm、重量は32.8ｇです。石材については現在調査中です。この剣の特徴のひとつとして刃のつけ方があげられます。残っている柄側から３分の１の部分で少し角を持って直線的に鋒方向につけられています。この特徴は弥生時代前期前半の様相を示していますが、断面形状が少し丸みをもった菱形をしているため、なかでも新しい段階のものと考えられます。

■弥生時代中期

壺形土器や甕形土器のほか、石斧、石鏃が出土しています。壺形土器には口縁部内面に円形の浮文が貼りつけられているものや、口縁端部に山形の模様が施されているものが見られます。甕形土器では頸部に圧痕文突帯が巡るものがみられます。底部はくびれの上げ底の形状のものが出土しています。

石斧は試掘調査時に表面採集されました。残存している長さは10.2cm、最大の幅は6.6cm、厚さは1.9cm、重量は190ｇです。平面形は短冊形をしています。刃がやや片刃に付けられていて加工用の斧と考えられます。

石鏃の平面形は三角形をしています。長さ、幅ともに1.5cm、厚さは2.4mm、重量は0.4ｇです。

■古墳時代

須恵器の杯、壺、甕などが出土しています。壺の口縁部片には、凹線文、櫛描き波状文が施されています。また土師器の甑（把手）が溝１などから出土しています。

■中世

供膳具の土師器の皿や杯、瓦器の碗、煮炊具の甕や釜などが出土しています。いずれも破片ですが、甕や釜の破片の表面には煤の付着が見られ使用されていたことがわかります。このほか、刃物を研ぐ砥石も出土しました。

３．まとめ

今回の調査結果は、大峰ヶ台丘陵南裾部における土地利用の様子を知る手がかりが得られた点にあります。古墳時代の溝や中・近世の溝・土坑・柱穴といった生活に関連した遺構が確認されたことから、少なくとも当地の利用は今からおよそ1,500年前頃の古墳時代後期には本格的に始まっていたことがわかりました。

特に注目されるのは磨製石剣で、発掘出土例としては小破片も含めて市内８遺跡９例目であり、貴重なものです。中・近世の溝から確認されましたが、石剣の形態から弥生時代前期のもので、色調からは北部九州との関係もうかがえる貴重な考古資料です。今回の磨製石剣の出土地点が丘陵ふもとであること、また、土器などを伴わない「単独」出土であることから、調査地やその北の丘陵部で、祭祀に伴い磨製石剣が埋納されていたものが、後世の土地開発行為に伴い現況に至ったものとみられます。

※磨製石剣については、愛媛大学名誉教授　下條信行先生に調査指導して頂きました。
※調査にあたって多大の御協力、御配慮をいただきました関係各位、御近所の皆様方に厚くお礼申しあげます。